



Title	パスカル『パンセ』断章229最終稿について
Author(s)	三原, 大輝
Citation	Gallia. 2025, 64, p. 15-25
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/102144">https://hdl.handle.net/11094/102144</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## パスカル『パンセ』断章 229 最終稿について<sup>1)</sup>

三原 大輝

### はじめに

パスカルの著作の中でも、特に『パンセ』は、その未完ゆえに独特の背景を持つ書物である。彼が早世した後に残されたのは、長短さまざまな考察が記されたメモ書きであり、それらが親族によってまとめられ、『パンセ』と呼ばれることとなった。したがって、この遺稿はパスカル自身による出版のための整理が全く施されておらず、「決定稿」としての形を持たない。そのため、『パンセ』草稿は、執筆途中の状態がそのまま残されている。

本稿では、断章 229<sup>2)</sup>の生成過程に関する新たな知見を提示する。特に、パスカル独自の原稿執筆法に着目し、テキストの加筆修正や表現の変遷を検討することで、彼がどのようにして本断章を構成していったのかを解明することを目指す。

### Ⅰ. パスカル独自の原稿執筆法

断章 230 の検討をもとに前田陽一は「複読法」<sup>3)</sup>という『パンセ』草稿読解手法を考案した。複読法が想定するパスカルの原稿執筆法というのは、初稿作成の際には、後日の加筆修正のために紙片の上下左右の余白と本文の行間の余白を十分に確保しテキストを記し、そして、後日に加筆修正を施す際には、初稿作成時に確保していた余白を利用するという方法であった。また、初稿において修正を施す際には確保した余白を侵食しないように意を費やしていたという。すなわち、複読法が示す『パンセ』草稿読解の枠組みというのは、草稿に施された加筆修正を一括して取り込むことで最終稿が、紙片の上下左右と行間の余白に施された加筆修正をすべて取り除くことで初稿を読み取れるというものである。前田はこの読解手法を全ての『パンセ』断章に適応できると考えていたのであろう。

しかしながら、複読法が示すところの初稿作成時においても、後日の加筆修正のために保たれていたはずの余白が用いられて修正が施されている例が認められる。私見によれば、これらの例は、作者の頭に訪れた想念をどのようなものであれ、それらが過ぎ去る前に書き出すことに主眼が置かれている。そのため、普段の執筆ルールを無視した咄嗟の修正が施されている。このような例が認められる以上、複読法が示す草稿読解の枠組みを『パンセ』断章に一律に当てはめること

1) 本稿は JSPS 科研費 23KJ1504 による研究成果の一部である。

2) 『パンセ』の断章番号は Pascal, *Pensées, opuscules et lettres*, éd. Philippe Sellier, «Classiques Jaunes», Littératures francophones, Paris, Classiques Garnier, 2011 に基づく。

3) Yoichi Maeda, «Le premier jet du fragment pascalien sur les deux infinis», dans *Études de Langue et Littérature française*, n° 4, 1964, p. 1-19.



## + H. 5

En Voyant l'aveuglement Et la Misere de l'homme, En regardant  
 tout l'Vniuers muet Et l'homme sans lumiere abandonné  
 a luy mesme Et comme egaré dans ce recoin du l'Vniuers  
 sans sauoir qui l'y a mis ce qu'il y est uenue faire  
 ce qu'il deuendra en mourant, Incapable de toute  
 connoissance, J'entre en effroy Comme Vn {enfant} <sup>homme</sup>  
 qu'on auroit porté endormy dans vne {bois effroyable} <sup>Isle deserte Et effroyable</sup>  
 Et qui se ueilleroit sans connoistre {ou il est sans} <sup>Et sans moyen d'en sortir</sup>  
 {force p<sup>r</sup> marcher sans compagnie sans assistance}  
 Et sur cela [uoyant d'autres personnes auprez de moy de mesme]  
 [nature] J'admire comment on n'entre point en desespoir  
 d'un si miserable estat. Je Voy d'autres personnes auprez  
 de moy d'une semblable nature <sup>Je leur demande s'ils sont mieux instruits que moy</sup> <sup>++</sup>  
 {Est que} ces miserables egarez, ayant regardé autour  
 d'eux Et ayant Veu quelques objets plaisants s'y sont donnez  
 Et s'y sont attachez. Pour moy Je n'ay pu y prendre  
 d'attache, Et considerant combien il y a plus d'apparence  
 qu'il y a autre chose que Ce que Je Voy J'ay recherché  
 si ce dieu n'auroit point laissé quelque marque de soy.  
 Je Voy plusieurs Religions contraires, Et partant  
 toutes fausses excepté Vne Chacune Veut estre crue  
 par sa propre autorité Et menace les Incrédulés Je ne  
 les croy donc pas la dessus. Chacun peut dire cela Chacun  
 peut se dire prophete mais [chacun] Je Voy la Chrestienne ou  
 je trouue des prophetes, Et c'est ce que Chacun ne peut pas faire

++ Jls me disent  
 que non Et sur  
 cela

先に複読法を用いて本文の最終稿を示す。草稿から読み取られる最終稿の構成は草稿から作成された二つの写本においても同様である。

H.5 En Voyant l'aveuglement Et la Misere de l'homme, En regardant tout l'Vniuers muet Et l'homme sans lumiere abandonné a luy mesme Et comme egaré dans ce recoin du l'Vniuers sans sauoir qui l'y a mis ce qu'il y est uenue

faire ce qu Il deuiendra en mourant, Incapable de toute connoissance, J entre en effroy Comme Vn homme qu on auroit porté endormy dans vne Jsle deserte Et effroyable Et qui s eueillerait sans connoistre Et sans moyen d en sortir Et sur cela J admire comment on n entre point en desespoir d Vn si miserable estat. Je Voy d autres personnes auprez de moy d Vne semblable nature je leur demande s Ils sont mieux Instruits que moy Ils me disent que non Et sur cela ces miserables egarez, ayant regardé autour d eux Et ayant Veu quelques objets plaisants s y sont donnez Et s y sont attachez. Pour moy Je n ay pu y prendre d attache, Et considerant combien Il y a plus d aparence qu Il y a autre chose que Ce que Je Voy J ay recherché si ce dieu n auroit point laissé quelque marque de soy. Je Voy plusieurs Religions contraires, Et partant toutes fausses excepté Vne Chacune Veut estre crue par sa propre autorité Et menace les Incrédulés Je ne les croy donc pas la dessus. Chacun peut dire cela Chacun peut se dire prophete mais Je Voy la Chrestienne ou je trouue des propheties, Et c est ce que Chacun ne peut pas faire

H.5 人間の盲目と悲惨さを見て、全宇宙が沈黙しているのを眺め、人間が光もなく打ち捨てられ、この宇宙の片隅に迷い込み、誰がそこに自分を置いたのか、何をしにそこへ来たのか、死んだらどうなるかを知ることなく、つまり認識をすることができない様を眺めるとき、私は、眠っている間に恐ろしい孤島に運ばれ、目覚めると分からずそこから脱出する手段もない人のような恐怖に襲われる。そう思うと私は、これほど悲惨な状態でどうして絶望に陥らないか分からない。私は周囲に同類の性質の人々を見て、彼らに、私より多くのことを知っているかどうか尋ねる。彼は私に否と答える。そしてその上にこれらの惨めな迷い人たちは、周囲を眺め、なにか愉快なものを目にする、それに専念し執着した。私についていえば、それらに執着することができなかった。そして、自分が見ているもの以外のなにかがあるという多くの痕跡がどれほど存在するかを考え、この神が自身の何らかのしるしを残していないかどうかを探求した。私は相反する多くの宗教をみて、ゆえに、一つを除き、全て偽りである。各々の宗教は信じて自身の権威によって信じられ、不信仰者たちを脅きたいと望んでいる。したがって、私はそれらの宗教を信じない。そのようなことは誰でも言える。誰でも自分を預言者であるということができるが、私が預言を見出すキリスト教を私は目にする。そして、それは誰でもできることではない。

本断章では、行間と左側の余白を利用して加筆修正が施されている。以下に、3つの加筆修正について順に取り上げる。

まず、一つ目は、本文上から6行目と8行目の箇所である。ここでは余白を使って後日加筆修正が行われている。本文中の「enfant」に横線が引かれ、その横の余



白に «homme» と書き換えられている。また、「bois effroyable」の部分も横線で消去され、その上の行間に «Jsle deserte Et effroyable» と修正されている。さらに、その次の行では «ou Jl est sans force… de mesme nature» が横線で消去され、行間に «Et sans moyen d'en sortir» と書き換えられている。これらの加筆修正を取り除くことで、第一稿<sup>5)</sup>のテキストが浮かび上がる。

次に、二つ目の例として、本文9行目から10行目にかけて横線が引かれ、テキストが放棄されている箇所がある。この部分は後日の加筆修正ではなく、第一稿作成時に放棄されたと考えられる。なぜなら、その続きに同じ表現が再度用いられてテキストが記されているからである。したがって、この箇所は第一稿のテキストには含まれない。

三つ目は、本文上から13行目の行間および左側の余白に施された加筆修正が挙げられる。「Et ce qui est prodigieux Est que」が横線で消去され、その上の余白に挿入記号が用いられて文章が加筆されている。また、加筆されたテキストが行間の余白に収まらなかったため、右側の余白に二つの十字記号が用いられ、テキストの続きが記されている。この修正を取り除くことで、第一稿のテキストが明らかになる。

H.5 En Voyant l'aveuglement Et la Misere de l'homme, En regardant tout l'Vniuers muet Et l'homme sans lumiere abandonné a luy mesme Et comme egaré dans ce recoing du l'Vniuers sans sauoir qui l'y a mis ce qu'il y est uenue faire ce qu'il deuiendra en mourant, Incapable de toute connoissance, J'entre en effroy Comme Vn enfant qu'on auroit porté endormy dans vn bois effroyable Et qui se eueilleroit sans connoistre ou Jl est sans force pour marcher sans compagnie sans assistance sur cela J'admire comment on n'entre point en desespoir d'Vn si miserable estat. Je Voy d'autres personnes auprez de moy d'Vne semblable nature Et ce qui est prodigieux Est que ces miserables egarez, ayant regardé autour d'eux Et ayant Veu quelques objets plaisants s'y sont donnez Et s'y sont attachez. Pour moy Je n'ay pu y prendre d'attache, Et considerant combien Jl y a plus d'apparence qu'il y a autre chose que Ce que Je Voy J'ay recherché si ce dieu n'auroit point laissé quelque marque de soy. Je Voy plusieurs Religions contraires, Et partant toutes fausses excepté Vne Chacune Veut estre crue par sa propre autorité Et menace les Incrédulés Je ne les croy donc pas la dessus. Chacun peut dire cela Chacun peut se dire prophete mais Je Voy la Chrestienne ou je trouue des propheties, Et c'est ce que Chacun ne peut pas faire

H.5 人間の盲目と悲惨さを見て、全宇宙が沈黙しているのを眺め、人間が光

5) 本稿では「premier jet」を「第一稿」と訳すことにする。「jet」には「新芽」という意味があり、この言葉は文字通りテキストの萌芽状態を指すのに適しており、「第一稿」という訳語はこの意味を含有する。

もなく打ち捨てられ、この宇宙の片隅に迷い込み、誰がそこに自分を置いたのか、何をしにそこへ来たのか、死んだらどうなるかを知ることなく、つまり認識をすることができない様を眺めるとき、私は、眠っている間に恐ろしい森に運ばれ、目覚めるとどこにいるから知らず、歩く力もなく、付き添いもない、援助もない子供のような恐怖に襲われる。そう思うと私は、これほど悲惨な状態でどうして絶望に陥らないか分からない。私は周囲に同類の性質の人々を見る。驚くべきことは、惨めな迷い人たちは、周囲を眺め、なにか愉快なものを目にとると、それに専念し執着したことである。私についていえば、それらに執着することができなかった。そして、自分が見ているもの以外のなにかがあるという多くの痕跡がどれほど存在するかを考え、この神が自身の何らかのしるしを残していないかどうかを探求した。私は相反する多くの宗教をみて、ゆえに、一つを除き、全て偽りである。各々の宗教は信じて自身の權威によって信じられ、不信仰者たちを脅したいと望んでいる。したがって、私はそれらの宗教を信じない。そのようなことは誰でも言える。誰でも自分を預言者であるということが出来るが、私が預言を見出すキリスト教を私は目にする。そして、それは誰でもできることではない。

(下線は論者による強調)

複読法が示す草稿読解の枠組みは、行間や紙片の上下左右の余白に記されたテキストが後日に行われた加筆修正である、という方針に基づいて草稿を検討するのであった。本断章においても、行間や紙片の余白に加筆修正が施されており、これらを取り除くことで第一稿のテキストを導くことができる。しかしながら、これらの加筆修正が必ずしも後日に施されたという確証はない。これらの加筆修正が第一稿作成時に施されたことも十分想定される<sup>6)</sup>。

### Ⅲ. 断章 229 の最終稿の試案<sup>7)</sup>

複読法が想定するパスカルの執筆方法によれば、第一稿をもとに後日に加筆修正が施され、テキストが練り上げられていく。加筆の際には、余白にテキストが記され、記号を用いて第一稿の本文に挿入されることが多く見受けられる。しかしながら、本断章において、余白に施された加筆を本文に組み込んで最終稿を構

6) 例えば、本文「Et sur cela」の部分にある「Et」は紙片の左側の余白に記されているようにも考えられる。複読法が想定するパスカルの執筆法によれば、行間や紙片の左右の余白は後日の加筆修正のために確保されるものとされるが、この「Et」がなければ文の句切れが不明瞭となり、「sur cela」が指す内容が明確でなくなるため、第一稿作成時において急遽この修正が加えた可能性を否定できない。また、太い筆致で第一稿のテキストの文字がなぞられ書き直されている箇所が見えるが、これらも後日に施されたものであるとは言い切れない。

7) 「移行」の章に取められる断章を中心にパスカルの執筆活動について 2024 年 6 月 1 日パスカル研究会第 173 回例会において口頭発表を行い、参加者のみなさまから貴重なご意見やご批判を賜った。とりわけ、武蔵大学の望月ゆか教授からは、断章 229 の最終稿における送り字の機能について、独自の解釈をご教示いただいた。この解釈を受けて本稿では、論者の考えを修正し、断章 229 の最終稿を再考した次第である。ここに改めて、望月氏をはじめ、発表をお聞きいただき、多角的なご意見を賜った参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

成すると、違和感が生じる箇所がある。

最終稿では、「je leur demande s Jls sont mieux Instruits que moy」という部分が挿入記号を用いて本文に加えられている。さらに、その続きも挿入記号を使い、右側の余白に「Ils me disent que non Et sur cela」と記されている。この挿入記号に従って読み進めると、先に示したように、本文中で「Et sur cela」という表現が近い位置で繰り返されることになる。しかし、17世紀フランスの古典主義的な文章美学においては、同じ表現を不用意に繰り返すことは避けられるべきであり、パスカルほどの識者が推敲の際にこの点を見過ぐすとは考えにくい。むしろ、彼には別の意図があったのではないかと推測される。

ここで考えられるのは、「Et sur cela」という表現自体が、挿入記号のように送り字として機能していたのではないかということである。送り字は、印刷所で製本を行う際に見開きの前のページの右下に次のページの冒頭部分を記入し、ページ合わせとして用いられる手法であり、二つの写本を作成する際にも使用されている。パスカルがこの手法を取り入れていたとしても不思議ではない。このようにして、次の最終稿のテキストが姿を現す。

[...] Je Voy d autres personnes auprez de moy d Vne semblable nature je leur demande s Jls sont mieux Instruits que moy Jls me disent que non Et sur cela J admire comment on n entre point en desespoir d Vn si miserable estat. ces miserables egarez, ayant regardé autour d eux Et ayant Veu quelques objets plaisants s y sont donnez Et s y sont attachez. [...]

私は周囲に同類の性質の人々を見る。彼らに、私より多くのことを知っているかどうか尋ねる。彼らは否と答える。そのことに私はこれほど悲惨な状態でどうして絶望に陥らないか分からない。惨めな迷い人たちは、周囲を眺め、なにか愉快なものを目にとると、それに専念し執着した。

(下線は論者による強調)

「Et sur cela」に送り字としての機能を持たせることで、表現の重複を避けるとともに、テキストの内容の繋がりをより明確にすることができる。また、このように解釈することで、「Et sur cela」の部分にある「ur」の文字が上から書き直され、読みやすくされていることにも納得がいく。というのも、余白に加筆された際、送り字の機能を本文に付与するために、わざわざ文字をはっきりと書き直したと解されるからである<sup>8)</sup>。

8) 記号以外に送字として用いられる例は「賭け」の断章として知られる断章680にも見出される。RO, p. 7では「fin de ce discours」が挿入記号の役割を果たしているという見解が示されている。湊野正満「『パスカルの賭』における「trois」の意味」仏文研究, n° 11, 京都大学フランス語学フランス文学研究室 1982年, p. 280-293.



#### Ⅳ. パスカルの執筆活動における断章 229 の位置付け

論者は、パスカルの執筆作業が以下の3つの段階から構成されていると仮説を立てている。すなわち、(1)アイデアの記録、(2)整理・分類、(3)論説文書の作成、である<sup>9)</sup>。そして、『パンセ』断章を検討する際には、複読法という草稿読解の枠組みを補助線として、まず対象の断章がこれら3つの執筆行程のどれに属しているかを検討する必要があると考えられる。では、断章 229 がこの3つの段階のどこに位置づけられるのかを検討しよう。

断章 229 の紙片については、ポール・エルンストによれば、元の大きな紙を半分に裁断したものであると指摘されている。この断章は、『パンセ』草稿集に収められている断章の中でも比較的大きな紙片に記されている。私見では、この紙片はもともと大きな紙にテキストが書かれた後に切り取られたものではなく、最初から現在のサイズで使用された可能性が高いと考える。というのも、紙片上部には、紙片を使い始める際に記された十字マークが見られるためである。また、「H. 5」という記号は、本文が作成された後に分類作業の過程で付されたものと推測される。もし文書作成当初に記されたタイトルであれば、十字マークの下に記されるはずである。

しかしながら、本断章が(3)論説文書の作成と考えるのは早計である。なぜならば、第3段階では、切り取り整理・分類された断片的文書を元に、論説文書が作成されると想定される。その上、論説文書では、推敲が容易な執筆方法が採用されている。しかしながら本断章には通常の執筆方法が必ずしも適用されているとは言い切れない。

では、本断章はパスカルの執筆作業のどの段階に位置づけられるべきだろうか。この点について、ポール・ロワイヤル版の「序文」に手掛かりを求めることができる。

Et ces personnes [...], avouent [...] et que ce qu'elles virent de ce projet et de ce dessein dans un discours de deux ou trois heures fait ainsi sur le champ et sans avoir été prémédité ni travaillé, leur fit juger ce que ce pourrait être un jour, s'il était jamais exécuté et conduit à la perfection par une personne dont elles connaissaient la force et la capacité, qui avait accoutumé de tant travailler tous ses ouvrages, qui ne se contentait presque jamais de ses premières pensées quelques bonnes qu'elles parussent aux autres, et qui a refait souvent jusqu'à huit ou dix fois des pièces que tout autre que lui trouvait admirables dès la première<sup>10)</sup>.

聴衆たちは次のように認めている。 [...] そして即興で事前の入念な準備や推敲なしの2、3時間の講演で、聴衆たちがこの計画と構想からみたものは、

9) 拙論「パスカル『パンセ』草稿「premier jet」における加筆修正：セリエ版断章124、断章192」*Gallia*, n° 63, 2024, p. 3-12.

10) PASCAL, *L'Œuvre*, éd. Pierre Lyaud et Laurence Plazenet, Bouquins, 2023, p. 1042-1043.

彼らがその力量と能力を知るところの著者によって、これはいつの日かこの上なく仕上げられそして完全なものになると彼らに判断させた。その著者は自身のすべての著作をよく推敲する習慣があり、初めの着想に、それが他人にとっていかに良くみえても、ほとんど満足せず、彼以外の他人が初稿から見事であると思う作品を8回あるいは10回もしばしば書き直していた。

この証言は『プロヴァンシャル』やその他の著作の仕事ぶりに関するものであると考えられる。パスカルには何度も推敲を重ねて著作を仕上げる習慣があったことが窺える。この習慣については他の文書においても確認することができる<sup>11)</sup>。次に『パンセ』執筆に関する箇所をみよう。少々長くなるが理解を深めるために詳細に引用する。

C'est néanmoins pendant ces quatre années de langueur et de maladie qu'il [= M. Pascal] a fait et écrit tout ce que l'on a de lui de cet ouvrage qu'il méditait, et tout ce que l'on en donne au public. Car, quoiqu'il attendît que sa santé fût entièrement rétablie pour y travailler tout de bon, et pour écrire les choses qu'il avait déjà digérées et disposées dans son esprit; cependant lorsqu'il lui survenait quelques nouvelles pensées, quelques vues, quelques idées, ou même quelque tour, et quelques expressions qu'il prévoyait lui pouvoir un jour servir pour son dessein; comme il n'était pas alors en état de s'y appliquer aussi fortement qu'il faisait quand il se portait bien, ni de les imprimer dans son esprit et dans sa mémoire, il aimait mieux en mettre quelque chose par écrit pour ne le pas oublier; et pour cela il prenait le premier morceau de papier qu'il trouvait sous sa main sur lequel il mettait sa pensée en peu de mots, et fort souvent même seulement à demi-mot; car il ne l'écrivait que pour lui; et c'est pourquoi il se contentait de le faire fort légèrement pour ne pas se fatiguer l'esprit, et d'y mettre seulement les choses qui étaient nécessaires pour le faire ressouvenir des vues et des idées qu'il avait.

C'est ainsi qu'il a fait la plupart des fragments qu'on trouvera dans ce recueil; de sorte qu'il ne faut pas s'étonner s'il y en a quelques-uns qui semblent assez imparfaits, trop courts, et trop peu expliqués, et dans lesquels on peut même trouver des termes et des expressions moins propres et moins élégantes. Il arrivait néanmoins quelquefois qu'ayant la plume à la main il ne pouvait s'empêcher en suivant son inclination de pousser ses pensées, et de les étendre

11) ニコルはパスカルから執筆作業について教わっており、最初に書き出したものは「さまざまな思想の形を成さない鉛筆画」であった。そして、この初稿を基に推敲が行われ、作品が完成に至るという。このニコルの執筆作業は単に自身の方法にパスカルの執筆作業から役立つ部分を取り入れたのではなく、その欠点までも取り入れるほどに模倣していたという。(Sainte-Beuve, *Port-Royal*, éd. Philippe Sellier, Paris, R. Laffont, «Bouquins», 2004, t. I, p. 1084.)

un peu davantage, quoique ce ne fut jamais avec la force et l'application d'esprit qu'il aurait pu faire en parfaite santé. Et c'est pourquoi l'on en trouvera aussi quelques-unes plus étendues et mieux écrites, et des chapitres plus suivis et plus parfaits que les autres.

Voilà de quelle manière ont été écrites ces pensées. [...] <sup>12)</sup>

しかしながら、この衰弱と病の4年間の間に、パスカル氏は思索していたこの著作の現存するすべて、すなわち出版されるすべてのものを作成し記した。というのも、氏は本腰を入れてそれに取り掛かるために、また自身の精神の内にすでに消化し整理されたものごとを書くために自身の健康が完全に回復するのを待っていたのだが、しかしながら、新たな考えや、見解、着想、あるいはいつの日か自身の構想に役立ち得ると思いき何らか

言い回しや表現が不意に現れたときには、氏はその当時、健康であった頃と同じようしっかりと専念することも、またそれらを精神と記憶の内に刻み込むことができない状態であったので、氏は備忘のためにそれらの思いつきを書き留めることを好んだ。そのために、氏は手近にあった紙片を取り、その上に自身の考えをわずかな語で、しばしば言葉半ばのみで書き付けた。なぜなら、氏は自身のためだけに書いただけであった。そのようなわけで、氏は精神を疲れさせないようにごく簡単にそれらの作業を行い、そして、思いついた見解や着想を思い出させるのに必要なものごとだけを書くよう留めていた。このようにしてこの文集に見出される大部分のフラグマンは作成された。したがって、ひどく不完全で、あまりにも短く、あまりにも説明が足りないように見受けられるものがあったも、またそこに用語と表現が適切さと優雅さにおいて劣ると思われても驚く必要はない。しかしながら、時折、氏は筆を執り、心の傾向に任せて、考えを押し進め、完全に健康であった状態で成し得た力量と集中を伴わなかったとしても、少しばかり考えを展開することがあった。そのようなわけで、より展開されより良く書かれたものや、他よりもより筋の通りより完全な章が見出される。

以上がどのようにこれらパンセが記されたかである。

(下線は論者による強調)

ポール・ロワイアル版「序文」の証言によれば、パスカルは頭の中で完成した文章を執筆していたが、病によってその習慣は妨げられ、結果的に断片的文書が多く書き残された。一方で、時には着想を書き進め、一定の分量を持つ論説文書が作成されたという。ただし、断片的文書作成の理由を単純に病の影響と結びつけるのは合理的とは言えない。まず優れた記憶力を有していたとしても、あえて断片的文書を作成せず、これらを活用しないことに利点はほとんどないように思える。そうであるならば、パスカルにおいても思想の形をなさないものを断片的

12) PASCAL, *L'Œuvre*, éd. Pierre Lyaud et Laurence Plazenet, Bouquins, 2023, p. 1042-1043.

に書きつける習慣があったと推測できる。

さらに、ポール・ロワイアル版「序文」は、パスカルが書き残したものに「fragments」と「pensées」の2つの傾向を認めている。前者は、訪れた想念を記録したもので、多くの場合、大きな紙片に書きつけられ、(2)整理・分類において切り取られ、束に分類される。後者は、ある事柄について頭の中である程度整理された内容が記されている。(1)アイデアの記録においても、その分量が比較的多い場合がある。

断章 229 は、後者の「pensées」に当てはまると考えられる。すなわち、アイデアの記録段階においてすでに論説文書作成が試みられていたと想定される。そのため、この断章では、他の断片とは異なり横線で区切りを示すことなく、紙片がそのままの大きさと利用され、束に分類されていたと考えられる。また、論説文書作成が試みられたものの、依然としてアイデアの記録段階にあったため、後日の加筆修正ではなく咄嗟に修正が施されているという状況も理解できる。

## V. むすびに代えて

本稿では、断章 229 を通じてパスカルの執筆方法とその生成過程に焦点を当て、新たな解釈の可能性を探索した。複読法が示す草稿読解の枠組みは、パスカルが一貫して余白を確保し、後日に加筆修正を施すという前提に基づいている。しかしながら、断章 229 においては、その方法が必ずしも適用されているとは言い切れず、パスカルが想念をとらえ、書き留める瞬間の即時的な判断が反映されているとも考えられる。すなわち、彼はしばしば構築されたルールを超えて、柔軟な執筆活動を行っていたと推測される。

パスカルの執筆活動全体についていえば、その過程は一様に想定できず、場合によってはしばしば即興的であった。断章 229 は、その中でも特に、アイデアの記録と論説文書の作成が同時進行で行われた例と見ることができる。

また、送り字としての「Et sur cela」に注目し、その表現がテキスト全体の流れを整える役割を果たしている可能性についても検討した。これにより、テキストの重複を回避し、文脈の一貫性を保つための手法として送り字が機能することが示唆された。似たような表現が既に使用されている場合には、送り字を使うことで重複を回避し、文脈の連続性を保つ効果が期待できる。また、送り字の使用に関しては、どのような場合に送り記号ではなく送り字を使うのが適切か、今後検討していくべき課題である。

(大阪大学博士後期課程在学中)